

I
序

いまひそかにマルクス主義とマルクス主義運動の歴史に根底的変容が起りつつある。そのもつとも明らかな徴候は、ヴェトナム、カンボジア、中国のあいだの最近の戦争である。これらの戦争は、それが独立性と革命性について疑う余地のない体制同士のあいだで起こった最初の戦争であり、しかも交戦当事国のいずれもこの流血沙汰をマルクス主義特有の理論的観点から正当化しようという試みをなんら行っていないという点で、世界的意義をもっている。一九六九年の中ソ国境紛争、そして、ドイツ（一九五三）、ハンガリー（一九五六）、チェコスロヴァキア（一九六八）、アフガニスタン（一九八〇）に対するソ連の軍事介入、これらについてはなお——人それぞれの好みに応じ——「社会帝国主義」「社会主義の防衛」等々の用語で解釈することが可能であったのに対し、いまではおそらく誰ひとりとしてそうした語彙がインドシナで起こっていることになにか関わりをもっているなどとは信じていないだろう。

一九七八年二月、一九七九年一月のヴェトナムのカンボジア侵攻と占領が、革命的マルクス主義体制の、革命的マルクス主義体制に対する、最初の大規模な通常戦争であったとすれば、翌二月の中国のヴェトナム攻撃は、この先例をすみやかに追認するものであった。今世紀末どこかで大戦が起るとして、中小の社会主義諸国はもとより、ソヴィエト連邦と中華人民共和国が、必ず同一陣営を支持し、あるいは同

一陣営にたつて戦うであろう、こう請け合えるのはよほどのお人好しだけだろう。あるいは、ユーゴスラヴィアとアルバニアがある日なぐりあいをはじめると、誰が自信をもって言えるだろう。一九四五年以来、東欧におけるマルクス主義体制間の武力紛争が、赤軍の圧倒的存在によってどれほど予防されてきたことか、東欧の駐屯地からの赤軍の撤退を要求するさまざまのグループはとくと考えなければいけない。

こう考えてみると、第二次世界大戦以降に成功したすべての革命が、みずからを国民的（ヘナショナル）用語で規定したこと——中華人民共和国、ヴェトナム、社会主義共和国その他——そうすることで、革命前の過去から継承した領土的、社会的空間にみずからを確固として定置してきたこと、こうした事実が浮かび上がってくる。そしてまたその裏返しとして、ソヴィエト連邦が、大ブリテン・北アイルランド連合王国と共に、その名称からナショナルリテイ（国民的帰属）^{*}を排除した希有な例であるという事実は、ソヴィエト連邦が二一世紀の国際主義的秩序の先駆者であるだけでなく、一九世紀の国民国家成立以前のプレ・ナショナルな王朝国家の遺産相続者でもある、ということを示している。⁽²⁾

エリック・ホブズボームはこう宣言している。「マルクス主義運動と国家は、形式的にも実質的にも、

* 原語は *nationality*。この言葉は、通常、「国民性」と訳されるが、実は、(1) 国民的性格（国民性）、(2) ナショナルリズム、(3) 国民的地位、帰属、とりわけ法的地位（国籍）、(4) 国民としての政治的独立、または国民としての存在、(5) 出自、伝統、言語その他を共有し、国民国家を構成しうる人民（国民）、などの意味をもち、「国民性」では誤解を招きやすい。したがって、ここでは、この言葉のもつこうした多義性にかんがみ、ナショナルリテイとし、文脈上、適当と判断されるばあいには、「国民的帰属」「国籍」「国民」などの訳を付すことにする。

国民的、つまり国民主義的となつてきた。この傾向が将来、消滅するであろうことを示す徴候はなにもない。³⁾「まったくその通り。それどころか、こうした傾向は社会主義世界にのみ限られているわけでもない。毎年のように国際連合^{ユナイテッド・ネーションズ}（諸国民の連合）は新しいメンバーを受け入れている。そして、かつては十分に統合されていると考えられていた「旧国民」^{オールド・ネーションズ}が、その国境内において、「サブ」・ナシヨナリズム、つまり、やがて将来の幸せなある日この「サブ」をふり捨てることを夢見るナシヨナリズム、の挑戦を受けている。現実はきわめて明白である。かくも長きにわたつて予言されてきたあの「ナシヨナリズムの時代の終焉」は地平の彼方にすら現れてはいない。実際、国民を構成する^{ネーションズ}ということは、我々の時代の政治生活におけるもつとも普遍的で正統的な価値となつている。

しかし、事實は明快でも、その説明については長い論争が続いている。ネーション（国民）、ナシヨナリティ（国民的帰属）、ナシヨナリズム（国民主義）、すべては分析するのはもちろん、定義からしてやたらと難しい。ナシヨナリズムが現代世界に及ぼしてきた広範な影響力とはまさに対照的に、ナシヨナリズムについての妥当な理論となると見事なほどに貧困である。ヒュー・シートンワトソン——ナシヨナリズムに関する英語の文献のなかでは、もつともすぐれたそしてもつとも包括的な作品の著者で、しかも自由主義史学と社会科学の膨大な伝統の継承者——は慨嘆しつつこう述べている。「したがって、わたしは、国民についていかなる『科学的定義』も考案することは不可能だと結論せざるをえない。しかし、現象自体は存在してきたし、いまでも存在している。また、トム・ネアン——先駆的研究『連合王国の解体』の著者で、マルクス主義史学と社会科学のこれまた等しく膨大な伝統の継承者——は率直にこう言つてい

る。「ナシヨナリズムの理論は、マルクス主義の重大な歴史的蹉跌の象徴である。」⁽⁵⁾しかし、この告白ですら、それが「マルクス主義の」長期にわたる自覚的な理論的解明の試みの末の不本意な結末であるという誤解を招きかねない。正しくはこう言わなければならない。ナシヨナリズムはマルクス主義理論にとつて厄介な変則であり続けてきたのであり、まさにその故に、正面から対決されることなく無視されることのほうが多かつたのだと。さもなくば、マルクスが、一八四八年のあの記念碑的定式化、「いづれの国のプロレタリアートも、当然、まずそれ自身のプロレタリアートをかたづけなければならない」において、この⁽⁶⁾決定的に重要な代名詞が何を指示しているのか明示せずすませてしまったことを、どう説明できようかあるいはまた、一世紀以上にもわたつて、「ナシヨナル・ブルジョワジー」の概念が、この形容詞「ナシヨナル」の妥当性を理論的に証明しようという真剣な努力もないままに使われてきたことを、どう説明できようか。なぜ、ブルジョワジー——それは生産関係の観点から定義される限り、世界階級である——の⁽⁷⁾こうした「国民的」分割が理論的意義をもつのか。

本書の目的は、ナシヨナリズムのこの「変則」をもつと満足のいくように解釈するにはどうすればよいのか、その試論を提供することにある。思うに、この問題については、マルクス主義理論も自由主義理論もともに、ちょうどブレマイオスの天動説がその末期にそうであつたごとく、なんとか「現象を救いあげ〔理論に合わせ〕よう」と視野狭窄に陥つており、いまやコペルニクスの視座の転換が求められているのだ。わたしの理論的出発点は、ナシヨナリテイ、あるいはこの言葉が多義的であることからすれば、⁽⁸⁾国民を構成するということと言ってもよいが、それが、ナシヨナリズム〔国民主義〕と共に、特殊な文化

的人造物であるということにある。ナシヨナリテイとナシヨナリズムが文化的人造物であること、これを正しく理解するためには、それがいかにして歴史的存在となったか、その意味がときとともによろしく変化してきたか、そして今日、なぜそれがかくも深く情念を揺さぶる正統性をもつのか、これを注意深く検討する必要がある。あるいはこう言えばよいだろうか。つまり、ナシヨナリテイ、ナシヨナリズムといった人造物は、個々別々の歴史的諸力が複雑に「交叉」するなかで、一八世紀末にいたつておのずと蒸溜されて創り出され、しかし、ひとたび創り出されると、「モジュール」〔規格化され独自の機能をもつ交換可能な構成要素〕となつて、多かれ少なかれ自覚的に、きわめて多様な社会的土壤に移植できるようになり、こうして、これまたきわめて多様な、政治的、イデオロギー的パターンと合体し、またこれに合体されていったのだと。そしてまた、この文化的人造物が、これほどにも深い愛着^{アクトゥエラメント}を人々に引き起こしてきたのはなぜか、これが以下においてわたしの論じたいと思うことである。

概念と定義

さて、上に挙げた問題にとりかかると先立つて、まず簡単に「国民」^{ナシヨン}の概念について考察し、さしあつたつての定義を与えておくことにしよう。ナシヨナリズムの理論家たちは、しばしば、次の三つのパラドックスに面くらしい、ときにはいら立ちをおぼえてきた。その第一は、歴史家の客観的な目には国民が近代的现象とみえるのに、ナシヨナリストの主観的な目にはそれが古い存在とみえるということである。そ

の第二は、社会文化的概念としてのナシヨナリテイ〔国民的帰属〕が形式的普遍性をもつ——だれもが男性または女性として特定の性に「帰属」しているように、現代世界ではだれもが特定の国民ナシヨナリテイに「帰属」することができ、「帰属」すべきであり、また「帰属」することになる——のに対し、それが、具体的に、はいつも、手の施しようのない固有さをもつて現れ、そのため、定義上、たとえば「ギリシア」というナシヨナリテイは、それ独自の存在となつてしまふということである。そしてその第三は、ナシヨナリズムのもつあの「政治的」影響力の大きさに対し、それが哲学的に貧困で支離滅裂だということである。別の言い方をすれば、ナシヨナリズムは、他のイイズム〔主義〕とは違つて、そのホツプスも、トクヴィルも、マルクスも、ウェーバーも、いかなる大思想家も生み出さなかつた。この「空虚さ」の故に、ナシヨナリズムは、コスモポリタンでいくつもの言語をあやつる知識人には受けがよくない。ちやうど、オークランドを目的の当たりにしたガートルード・スタインのように、ひとはすぐに「そこにはなんにもない」と結論してしまふ。^(二)トム・ネアンのようにナシヨナリズムに同情的な研究者ですら、やはり次のように書いてゐるのは、そのことをよく表している。「『ナシヨナリズム』は、個人における「神経症」と同様、近代発展史の不可避の病理であり、神経症と同じように本質的にあいまいでやがては痴呆症へと陥つていくものであつて、広く世界に蔓延した無力感のジレンマに巣くつた（社会小児病ともいふべき）ほとんど不治の病である。」^(三)

こういう問題が起こるのは、我々が、無意識のうちに、大文字のNで始まるナシヨナリズムの存在を——ちやうど我々が大文字のAで始まるエイジ〔時代〕の存在を具体化するように——具体化して、その

上で「それ」をイデオロギーのひとつとして分類しようとするからである。(だれでも、いま何歳、という意味では歳をもっている。しかし、大文字のAで始まるエイジ〔時代〕はたんなる概念的な表現にすぎない。)つまり、国民イナシヨナリズムと国民主義は、「自由主義」や「ファシズム」の同類として扱うよりも、「親族」や「宗教」の同類として扱ったほうが話は簡単なのだ。

そこでここでは、人類学的精神で「親族」や「宗教」を定義するように「国民を次のように定義することにしよう。国民とはイメージとして心に描かれた想像イマジンド・ボライイカル・コミュニティの政治共同体である——そしてそれは、本来的に限定され、かつ主権的なもの〔最高の意思決定主体〕として想像されると。

国民は「イメージとして心の中に」想像されたものである。というのは、いかに小さな国民であろうとこれを構成する人々は、その大多数の同胞を知ること、会うことも、あるいはかれらについて聞くこともなく、それでいてなお、ひとりひとりの心の中には、共同の聖餐コミュニオンのイメージが生きているからである。⁽⁹⁾ルナンは、この想像という行為について、彼独特の穏やかで婉曲な言い回しで次のように書いた。「さて、国民の本質とは、すべての個々の国民が多くのことを共有しており、そしてまた、多くのことをおたがいすつかり忘れてしまっているということにある。⁽¹⁰⁾」またゲルナーは、敢然と次のようなめざましい論を展開する。「ナシヨナリズムは国民の自意識の覚醒ではない。ナシヨナリズムは、もともと存在していないところに国民を発明することだ。」⁽¹¹⁾ゲルナーのこの規定は、少々過激ではあっても、実はわたしと同じことを言っている。もつとも、この規定の欠点は、彼が、ナシヨナリズムとは偽りの仮装であると言いたいあまり、「発明」を、「想像」と「創造」にではなく、「捏造」と「欺瞞」になぞらえたことにある。そう

することでは彼は、国民と並べてそれよりもっと「眞実」の共同体が存在するのだと言おうとする。実際には、しかし、日々顔付き合わせる原初的な村落より大きいすべての共同体は（そして本当はおそらく、そうした原初的村落ですら）想像されたものである。共同体は、その眞偽によつてではなく、それが想像されるスタイルによつて区別される。ジャワの村人たちは、かれらが一度も会つたことのない人々と結びつけられている、ということをもよく承知していた。しかし、その絆は、かつては、各人に固有のものとして、個人を中心に無限に伸縮自在な親類、主従関係のネットワークとして想像された。ジャワ語には、ごく最近まで、抽象的に「社会」を意味する言葉などなかつたのだつた。あるいはまた今日、我々は、^{アシヤン・レジウム}旧体制のフランス貴族を一つの階級と考える。しかし、こういうふう⁽¹²⁾に想像するようになったのは、確実に、ごく最近のことである。「X伯とはどなた」という問いに対する普通の返事は、「貴族の一員」ではなく、「Xの領主」「Y男爵夫人の伯父」あるいは「Z公の客人」といったものであつたらう。

国民は、限られたものとして想像される。なぜなら、たとえ一〇億の生きた人間を擁する最大の国民ですら、可塑的ではあれ限られた国境をもち、その国境の向うには他の国民がいるからである。いかなる国民もみずからを人類全体と同一に想像することはない。いかなる救世主的ナシヨナリストといえども、かつて歴史の一時代にキリスト教徒がキリスト者だけの惑星を夢見ることができたようには、すべての人類が自分たちの国民に参加する日を夢見ることはない。

国民は主権的なものとして想像される。なぜなら、この国民の概念は、啓蒙主義と革命が神授のヒエラルキーの王朝秩序の正統性を破壊した時代に生まれたからである。それは、普遍宗教のいかに篤信な信者

といえども、そうした宗教が現に多[○]元的に並存しており、それぞれの信仰の存在論的主張とその領域的広がりとのあいだに乖離があるという現実[○]に直面せざるをえない時代であり、人類史のそういう段階に成熟をみた国民は、自由であることを、そしてかりに「神の下に」であれば、神の下での直接的な自由を、^(三)見る。この自由を保証し象徴するのが主権国家である。

そして最後に、国民は一つの共同体として想像される。なぜなら、国民のなかにたとえ現実には不平等と搾取があるにせよ、国民は、常に、水平的な深い同志愛として心に思い描かれるからである。そして結局のところ、この同胞愛の故に、過去二世紀にわたり、数千、数百万の人々が、かくも限られた想像力の産物のために、殺し合い、あるいはむしろみずからすすんで死んでいったのである。

これらの死は、我々を、ナシヨナリズムの提起する中心的問題に正面から向いあわせる。なぜ近年の（たかだか二世紀にしかならない）萎びた想像力が、こんな途方もない犠牲を生み出すのか。そのひとつの手掛りは、ナシヨナリズムの文化的根源に求めることができよう。

原注

(1) この表現はただ戦闘の規模とスタイルを強調するためであって、戦争責任を問うものではない。誤解を避けるために付け加えておくと、一九七八年二月の侵攻は、二つの革命運動のバルチザンのあいだの、おそらく一九七一年にまでさかのぼるであろう武力衝突の延長上に起きたものであった。一九七七年四月以降、カンボジア側から仕掛けられ、すぐにヴェトナム側からも行われるようになった国境襲

撃は、しだいにその規模と範囲を広げ、一九七七年一二月、ヴェトナムの大規模な襲撃によってその頂点に達した。しかし、これらの襲撃はいずれも、敵の体制それ自体の転覆や広大な領土の占領を目的としたものではなく、また投入された部隊規模も、一九七八年一二月に展開された部隊規模とは比較にならない。戦争の原因をめぐる論争については、以下の研究においてきわめて注意深く跡付けられている。Stephen P. Heder, "The Kampuchean-Vietnamese Conflict," in David W. P. Elliott ed., *The Third Indochina Conflict*, pp. 21-67; Anthony Barnett, "Inter-Communist Conflicts and Vietnam," *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, 11:4 (October-December 1979), pp. 2-9; Laura Summers, "In Matters of War and Socialism Anthony Barnett would Shame and Honour Kampuchea Too Much," *Ibid.*, pp. 10-18.

(2) このような意味で連合王国がソ連邦と同格だということを疑う者は、この名称がいかなる国民的帰属を表示するものか、ちょっと自問してみればよい。大ブリト・アイリッシュ国民か。

(3) Eric Hobsbawm, "Some Reflections on 'The Break-up of Britain,'" *New Left Review*, 105 (September-October 1977), p. 13.

(4) Hugh Seton-Watson, *Nations and States*, p. 5. 傍点引用者。

(5) Tom Nairn, "The Modern Janus," *New Left Review*, 94 (November-December 1975), p. 3 参照。この小論は、そのまま *The Break-up of Britain*, 第9章 (pp. 329-63) に再録されている。

(6) Karl Marx and Friedrich Engels, *The Communist Manifesto*, in the *Selected Works*, I, p. 45. 傍点引用者。いかなる理論的解釈においても、この「当然」という言葉は、陶醉した読者に赤信号を点滅すべきはずの言葉である。

(7) アイラ・ケミレイネンが書いているように、この時期については、ナシヨナリズムについての学問的研究の「双子」の「始祖」、ハンス・コーンとカールトン・ヘイズが説得的に述べている通りである。

かれらの結論は、いくつかの国々でナショナリスト・イデオログが反論しようとしたほか、まともな論駁されたことはない。またケミレイネンによれば、ナショナリズムという言葉は、一九世紀末になつてはじめて広く一般に使われるようになったという。たとえば、一九世紀の多くの辞書には、この言葉は現れない。たとえアダム・スミスが諸「国民」の富で「この言葉を」呼び出したにせよ、そのとき彼がこの言葉によつて言わんとしたことは、「社会」あるいは「国家」という以上のもではなかつた。

Ara Kemläinen, *Nationalism*, pp. 10, 33, 48-49.

(8) *The Break-up of Britain*, p. 359.

(6) Seton-Watson, *Nations and States*, p. 5 参照。「私に言えることはこれだけだ。国民は、共同体の相当数のメンバーが、自分たちは国民を形成していると考えるとき、あるいは、自分たちが国民を形成したかのように行動するとき、存在する。」我々は、「自分たちは国民を形成していると考えるとき」という表現を「自分たちは国民を形成している」と想像するとき」に置き換えてよいであろう。

(10) Ernest Renan, "Qu'est-ce qu'une nation?" in *Oeuvres Complètes*, I, p. 892. さらに彼はこう付け加えている。「フランス市民はすべてサン・バルテルミー〔の虐殺〕、一三世紀の南フランスの〔異端の〕虐殺を忘れ去つてしまわなければならない。フランスには、フランク族の出身であると十分に証明できるような家族は十ほどもないのだ。……」〔サン・バルテルミーの虐殺とは、一五七二年、サン・バルテルミーの祝日の未明にパリではじまり、フランス各地に波及した旧教徒による新教徒の大量殺戮事件のこと。また一三世紀南フランスの虐殺とは、アルビジョア十字軍による南フランス、トゥールーズ伯領におけるアルビジョア派（カタリ派）異端の虐殺のこと。〕

(11) Ernest Gellner, *Thought and Change*, p. 169. 傍点引用者。

(12) たとえばホブズボームは「一七八九年当時、その数は人口約二三〇〇万のうち四〇万であったと言つて、フランス貴族を階級として「固定」する。Eric Hobsbawm, *The Age of Revolution*, p. 78 参照。

しかし、この統計的貴族像は、旧体制下の時代に想像可能であったであろうか。

訳注

- (一) 原語は、(there is) no there there.
- (二) アメリカ合衆国の忠誠の誓い、「わたしは、アメリカ合衆国の国旗およびそれが代表する共和国、神の下、一つの、不可分の、そしてすべてのために自由と正義をもつ国民に、忠誠を誓う」をふまえた表現。

ナシヨナリズムを考察する上で、一八世紀後半、一九世紀初頭の新興アメリカ諸国家がきわめて興味深いのは、これらの国家が、ナシヨナリズムの勃興について偏狭なヨーロッパ的思考を大きく支配してきた——おそらく世紀半ばのヨーロッパのナシヨナリズムからただちに推論できるからである——二つの要因をもってしては、ほとんど説明がつかないということによる。

まず第一に、ブラジルにせよ、アメリカ合衆国にせよ、あるいはスペインの元植民地にせよ、言語はこれらの国々をその本国から分化する要因ではなかった。アメリカ合衆国をふくめ、すべての国家はクレオール国家であり、それは、かれらが叛旗を翻した当の相手と言語、出自を共通にする人々によって形成され指導された。⁽¹⁾ 実際、言語は、これら初期の国民解放闘争においては争点にすらならなかったのだ。第二に、西半球のほとんどの地域について、ネアンの次のような一見説得力のある命題は⁽²⁾ どうも妥当し⁽²⁾ そうにない。ネアンは言う。

明瞭に近代的な意味でのナシヨナリズムの到来は、下層階級の政治的洗礼と結びついていた。……たとえときに、民主主義に敵対的になることがあつたにせよ、国民主義運動は、その見解においてきま

つて人民主義的であり、下層階級を政治生活に導入しようと試みた。最も典型的な場合には、それは、中産階級と知識人のおちつきのない指導の下に、民衆の階級的エネルギーを新国家支持へと動員し誘導するという形態をとった。

しかし、少なくとも南アメリカと中央アメリカでは、一八世紀末にはまだ、ヨーロッパ流の「中産階級」などとなるにたぬ存在だった。それはインテリゲンチアについても同じだった。なぜなら、「当時の植民地の静謐な日々には、読書が人間生活の堂々とした紳士気取りのリズムを乱すことなどなかった」からだった⁽³⁾。すでに見たように、スペイン領アメリカ最初の小説は一八一六年になってやっと出版されたのであり、それは、独立戦争勃発のずっとあとのことだった。史料がはっきりと示しているように、独立戦争のリーダーシップは、多数の大地主、そしてかれらと同盟した少数の商人、さまざまの専門的職業者^{プロフェッショナルズ}（法律家、軍人、地方・州の役人）によって掌握⁽⁴⁾されていた。

「下層階級を政治生活に導入する」どころか、ベネズエラ、メキシコ、ペルーなどの場合、マドリードからの独立に当初、拍車をかけた要因は、「下層階級」の政治的動員、すなわち、インディオあるいは黒人奴隷の反乱への恐怖⁽⁵⁾であった。この恐怖は、ヘーゲルのいう「世界精神の秘書」〔ナポレオン〕が一八〇八年、スペインを征服し、クレオールが非常時にイベリア半島からの軍事的支援をあてにできなくなると、ますます昂まった。ペルーでは、トゥパック・アマルー（一七四〇—一八一）に指導された大農民一揆の記憶がなお新しかった⁽⁶⁾。一七九一年には、トゥサン・ルヴェルテールが黒人奴隷の反乱を指導し、この

結果、一八〇四年には、西半球における第二の独立共和国が誕生して、ベネズエラの大奴隷農園主を戦慄させた。⁽⁷⁾一七八九年、マドリードがより人道的な新奴隷法を發布し、主人と奴隷の権利義務を詳細に規定したときには、「クレオールは、奴隷が、悪徳と独立（！）に染まりやすく、経済的に不可欠であるとの理由で、国家の介入を拒絶した。ベネズエラでは——そして実のところ、スペイン領カリブ海全域において——農園主は法律に抵抗し、一七九四年にはこれを停止させた。⁽⁸⁾」解放者ポリール自身、かつて、黒人の反乱は「スペインの侵略より一千倍も始末が悪い」と語ったことがある。⁽⁹⁾さらにまた我々は、十三植民地（アメリカ独立時の東部十三州）の独立運動の指導者の多くが大奴隷農園主であったことも、忘れてはならない。トーマス・ジェファソン自身、一七七〇年代に王党派の総督が反乱を使曠した主人と関係を絶った奴隷の解放を宣言したことに激怒したヴァージニアの農園主の一人であった。⁽¹⁰⁾マドリードが、一八一四—一六年、ベネズエラで返り咲きに成功し、また遠隔の地キトで一八二〇年までもちこたえることができたひとつの理由は、マドリードが、クレオールの反乱鎮圧の戦いにおいて、ベネズエラでは奴隷の、キトではインディオの支持を得たからであった。⁽¹¹⁾当時すでにヨーロッパ二流の国家であり、しかもつい先頃までナポレオンに征服されていたスペインに対する大陸的闘争がかくも長期化したこと、これは、ラテン・アメリカのこれら独立運動の「社会的な層の薄さ」を物語っている。

しかし、それでも、これらの運動は国民的独立運動であった。ポリールは奴隷について考えを改めることになったし、⁽¹²⁾その同志、解放者サン・マルティンは、一八二二年、「今後、原住民を、インディオ、土民などと呼んではならない。かれらはペルーの子にしてかつ市民であり、ペルー人として知られるべき

である」と宣言した。⁽¹³⁾（こう付け加えてもよいだろう。出版資本主義が、これら文盲者にまでまだ到達していなかったにもかかわらず、と。）

とすれば、ここに謎がある。なぜ、まさにクレオール人の共同体が、かくも早く、ヨーロッパのほとんどの地域よりもずっと以前に、我々国民という観念を発展させたのか。なぜ、多数の抑圧されたスペイン語を話さない住民をかかえるこれらの植民地において、そうした住民を国民同胞と意識的に再定義するクレオールが生み出されたのか。そしてスペインを、かれらがかくもさまざまに愛着をもっていたスペイン⁽¹⁴⁾を、外敵と再定義することになったのか。なぜ、ほとんど三世紀にわたって平穩に存在してきたスペイン・アメリカ帝国が、これほど突然に一八の別々の国家に分裂したのか？

説明としてもっともよく挙げられる二つの要因は、一八世紀後半におけるマドリードの支配強化と、自由主義的解放思想の普及である。たしかに、有能なる「啓蒙専制君主」カルロス三世（在位一七五九―一七八）の政策は、クレオール上流階級をしいに失望させ、怒らせ、警戒させた。ときに第二のアメリカ征服と嘲弄されるこの政策において、マドリードは、新税を課し、徴税を効率化し、本国による商業独占を強め、西半球内貿易を自己に有利に規制し、行政機構を中央集権化し、半島人（イベリア半島出身者^{ベニススライレス}）の大量移住を促進した。⁽¹⁵⁾たとえば、メキシコは、一八世紀初め、王に年間約三〇〇万ペソの収益をもたらしていたが、一八世紀末には、その額は五倍近く増えて一四〇〇万ペソに達し、そのうちわずか四〇〇万ペソが現地行政費の支払いに当てられただけだった。⁽¹⁶⁾これと並行して、一七八〇―九〇年の半島からの移住者は、一七一〇―三〇年の五倍にも達した。⁽¹⁷⁾

さらにまた、大西洋横断コミュニケーションの改善と、南北アメリカ各地がそれぞれの本国と言語、文化を共有していたという事実、これは、西欧でつくられつつあった新しい経済的、政治的教義が、比較的速やかにまた容易に伝達されるということを意味した。一七七〇年代末における十三植民地の反乱の成功、一七八〇年代末におけるフランス革命の開始も、大きな影響を及ぼさずにはいなかった。新たに独立した共同体がいずれも共和主義を採用したということ、これほどこの「文化革命」を確証するものはない。南北アメリカにおいて、王朝原理を再創造しようとする試みは、ブラジルをのぞいて、どこにおいても真剣には行われなかった。そしてブラジルにおいてすら、ポルトガル王自身が、一八〇八年にナポレオンを逃れてブラジルに移住しなかったなら、君主制はおそらく不可能であつたらう。(ポルトガル王は、一三年間、ブラジルに滞在し、帰郷に際して、息子をブラジル王ペードロ一世として即位させた。)

しかし、マドリードの攻勢と自由主義の精神は、なるほどスペイン領アメリカにおける抵抗への衝動を理解する上で重要ではあつても、それ自体としては、チリ、ベネズエラ、メキシコのような実体が、なぜ、感情的に受け入れられ、また政治的にうまくいくことになつたのか、を説明するものではない。あるいはまた、なぜ、サン・マルティンが、特定の原住民を「ペルー人」なる新語によつて定義すべしと布告せばならなかつたのか、そしてまた、結局のところ、なぜ、あのようなほんものの犠牲が払われたのかを説明するものでもない。たしかに、歴史的社會形成体としてみれば、クレオール上流階級は、長期的には、独立によつてうまくやつたと言えるだろう。しかし、一八〇八年から一八二八年にかけて、実際にこの時代に生きていた多くのこの階級の人々は、経済的に破滅したのだつた。(一例を挙げると、一八一四—一

六年のマドリードの反攻期に、「ベネズエラの地主の三分の二以上が、土地没収によつてひどいめにあつた。」⁽²¹⁾ そしてまた、やはり多くの人々が、大義のために、すすんでその生命をささげたのだつた。安樂階級の一部分がこのようにみずからすすんで自己を犠牲にしたこと、これこそ思索の糧である。

ではそれは一体なにか。これに答える手掛りは、「南アメリカの新生共和国が、かつてはそれぞれ、一六世紀から一八世紀にかけて行政上の単位であつた」という注目すべき事実⁽²²⁾に求められよう。この点で、南アメリカの共和国は、二〇世紀半ばにアフリカおよびアジアの一部に成立する新興国家の先駆けであり、一九世紀後半から二〇世紀初めに誕生したヨーロッパの新興国家とは、はつきりとした対照をなしている。南アメリカにおける行政単位の形成は、本来、かなり偶然的、恣意的なもので、そのときどきに行われた軍事的征服の空間的限界を定めたものにすぎなかつた。しかし、やがて、これらの単位は、地理的、政治的、経済的要因の影響下に、しだいに確固たる実体となつていった。スペイン領アメリカ帝国の広大さ、土壌と気候のさまざまの多様性、そしてとりわけ、産業時代以前におけるコミュニケーションの途方もない困難さ、こうした条件の下で、これらの単位は自足的性格をもつようになつていった。(植民地時代、ブエノス・アイレスからアカプルコまで海路四か月、帰路はそれ以上を要した。ブエノス・アイレスからサンチアゴへの陸路は、通常、二か月、カルタヘナまでは九か月かかつた。)⁽²³⁾ さらに、マドリードの商業政策は、結果的に、各行政単位を別々の経済地帯へと転化させることとなつた。「アメリカ人には母国との競争はすべて禁止され、大陸内の各地は相互に貿易することすら許されなかつた。アメリカの商品が大陸の一方から他方に送られる時には、迂回してスペイン本国の港を経由せねばならず、スペイン船が植民

地との貿易を独占した。⁽²⁴⁾「アメリカ革命の基本原則の一つ」が、「ウティ・ポッシデンティス〔汝、すだにもてるものを用うべし〕」の原則であり、これによって、それぞれの国民は、独立運動が開始された一八一〇年当時の領土の現状を維持することになった理由も、こうした経験によって説明されよう。⁽²⁵⁾さらにまた、この経験は、ポリバルのگران・コロンビア、リオ・デ・ラ・プラタ合衆国が短命に終わり、その旧来の構成単位（それは、今日、ベネズエラ・コロンビア・エクアドル、アルゼンチン・ウルグアイ・パラグアイ・ボリビアとして知られる）へと分解するのにも、影響を及ぼした。しかし、そうはいつても、「自然」地理的あるいは政治・行政的市場圏は、それ自体としては、人々の愛着を生み出しはしない。一体、だが、コメコン（ソ連・東欧）経済相互援助協議会）やEEC（ヨーロッパ経済共同体）のためにすすんで死のうとするだろう。

南北アメリカにおいてばかりでなく、世界の他の地域においても、行政単位が、ときとともに、いかにして、祖国と考えられるようになるかを理解するには、我々は、行政組織がどのようにして意味を創造するのかを見なければならぬ。人類学者ヴィクター・ターナーは、意味創造の経験としての、時間・身分・空間的な「旅」について、見事な分析を行っている。⁽²⁶⁾そうした旅は、すべて、解釈を必要とする。（たとえば、誕生から死にいたる旅は、さまざまな宗教的観念を生み出した。）ここでの我々の目的からすれば、旅の典型的様式は巡礼である。それは、キリスト教徒、ムスリム、ヒンドゥー教徒にとつて、ローマ、メッカ、ベナレスが、聖なる地理の中心と観念されたというだけでなく、さもなくば何の関係もない。

は。の。遠隔の地からこれらの中心へと巡礼者が不断に流れ、これによって、中心性が経験され（演出法的意味で）「実演される」ことにあつた。實際、ある意味では、古い想像の宗教共同体の外縁は、人々がどこに巡礼をするかによつて決定されたのだつた。⁽²⁷⁾すでに指摘したように、マレー人、ペルシア人、インド人、ベルベル人、トルコ人がメッカで奇妙にも物理的に並存すること、このことは、なんらかの形でこれらの共同性が観念されることなしには理解できない。カーバ神殿の前でマレー人と遭遇したベルベル人は自問したにちがいない。「なぜこの男は、私のしているのと同じことをし、私の唱えているのと同じ言葉を唱えているか。我々はおたがい話をすることもできないのに。」この問いには、ひとたび気づいてみれば、ただひとつの答え——「なぜなら、我々はムスリムだから。」——しかなかつた。たしかに、この偉大な宗教的巡礼の振付けには、常に二重の側面があつた。一方では、文盲の、俗語を話す者たちの大群が、儀式的な巡礼の道の濃密で物理的な実体をなし、その一方、それぞれの俗語共同体から引き抜かれた二言語に習熟した文人の小集団が、統一の儀礼を執行し、その集団的行為の意味をかれらにつき従う者たちに対して説明・解釈した。⁽²⁸⁾出版時代以前には、想像の宗教共同体の現実性は、なにもまして、無数の、やむことのない旅に深く依存していた。信心深い求道者たちが、ヨーロッパ全土から教学の「地方的中心」たる有名な修道院へ、そしてそこからさらにローマへと、自発的に流れていったことほど、全盛期の西欧キリスト教世界について、印象深いものはない。これら偉大な教学施設では、人々はラテン語を話し、そこには、我々が今日、アイルランド人、デンマーク人、ポルトガル人、ドイツ人などと呼ぶであろう人々が共に集つて共同体をなし、その聖なる意味は、こうした人々がその食堂にともに並ぶというまさにその

ことによつて、日々、解読されたのだつた。

このように、宗教的巡礼は、おそらくもつとも感動的で雄大な想像の旅であるが、それは同時に、それに対応する、もつと地味な、そして限られたせまい世俗的な旅をもつていたし、いまももつている。⁽²⁹⁾この世俗的な巡礼について、ここでの我々の目的にとりもつとも重要なことは、絶対主義王制の控頭、そして最終的には、ヨーロッパを中心とする世界帝国の登場によつてもたらされた巡礼路の変化であつた。絶対主義における内的推進力は、君主の直接コントロールする、そして君主に対してのみ忠誠な、統一的権力装置を創出することであり、それによつて、分権的で地方割拠的な封建貴族に對し、かれらを上からおさえこむことにあつた。ここで統一とは、人間と文書、それぞれの内的な互換性を意味した。人的な互換性は、新貴族——すなわち、まさに新参者であるが故に独自の権力をもたず、したがつて主君の意志の発現として務めることのできる人材——をさまざまの程度において、登用することにより促進された。⁽³⁰⁾こうして、絶対主義の役人は、封建貴族とは基本的に異なる旅をすることになつた。⁽³¹⁾その相違は、図式的に、次のように示すことができよう。典型的な封建的旅の様式においては、貴族Aの相続人は、父親の死に際し、父親の地位に就くため、一步上昇する。この上昇のためには、叙任のための中心への旅と先祖伝来の領地への帰郷の旅、この行つて戻る旅を必要とした。絶対主義の役人にとっては、しかし、事はそう簡単ではない。死ではなく才能が、彼の行路をかたちづくる。彼は、その前途に、中心ではなく頂上を臨む。彼は、何重にも円弧を描きながら、崖道を登っていく。円弧はしだいに狭まりきつくなり、ついには頂上に到達すると考えながら。彼は、五等級の役人としてA町に派遣されて役人としての経歴を開始し、四等

級で中央に戻る。ついで三等級でB州に赴任し、さらに二等級でC副王領に行き、最後には、その巡礼を一等級で首都において終える。この旅においては、どこにも確実な休息地はない。すべての休止は暫定的なものであり、彼は決して帰郷したいとは望まない。彼にとつて故郷にはなんらの内在的価値もない。そして、彼は、その上昇らせんの道程において、意欲的な巡礼仲間としての同僚の役人たちと出会う。彼が聞いたこともないような場所、会いたいと思わない一族出身の同僚の役人たち。しかし、旅の道連れとしてかれらと行を共にするうち、そしてとりわけ、単一の国家語を共有するとき、相互連結の意識（「なぜ我々は……ここで……一緒にいるのか」）が芽生える。そして、B州出身の役人AがC州の行政を担当し、C州出身の役人DがB州の行政を行うとすれば——それは絶対主義王制下においてはじめて起こりうるようになった状況である——こうした互換性の経験は、それ自体の説明を要求する。絶対主義のイデオロギー、これを、新貴族自身が、君主と同じく苦心して作り上げていく。

こうした人的互換性を補強する文書の互換性は、標準化された国家語の発達によって促進された。一世紀から一四世紀にかけてのロンドンにおけるアングロサクソン語、ラテン語、ノルマン語、初期英語の威風堂々の行列が示すように、原理的には、いかなる文語であれ、独占権さえ付与されれば、この国家語の機能をはたすことができた。（しかし、ラテン語ではなく俗語に独占権が付与されたところでは、中央集権化の機能がさらに達成された。それは、これによって、役人が、彼の君主の競争者たる他の主権者の機構に流出するのが制限され、かくして、いわば、マドリードの巡礼に役人とパリの同類とは互換不能となったからである。）

原理的には、近世ヨーロッパの大王国のヨーロッパ外への膨張は、このモデルを、新旧両大陸にまたがる大官僚制の発展として、ただ拡大するだけのはずであった。しかし、現実には、そうはならなかった。

絶対主義機構の手段的合理性——とりわけ出生よりも才能にもとづいて採用と昇進を行おうとすること——は大西洋の東岸から先ではまれにしか作動しなかった。⁽³²⁾

南北アメリカにおいては、傾向はひじょうにはつきりしている。スペイン領アメリカで一八一三年までに副王に任命された一七〇名のうち、クレオールはわずか四名しかいなかった。この数字がどれほど驚くべきものかは、一八〇〇年当時（一三七〇万人の原住民を支配した）西帝国の「白人」クレオール三二〇万人に対し、スペイン生まれのスペイン人はその五パーセント以下であったことからうかがわれよう。メキシコ革命前夜、この副王領のクレオールと半島人の比率は七〇対一という圧倒的なものであったにもかかわらず、クレオールの司教は一人しかいなかった。⁽³³⁾そして、言うまでもなく、クレオールがスペインにおいて重要な官職に昇るなどということは、ほとんど考えられないことであった。⁽³⁴⁾しかも、クレオール役人の巡礼の旅は、ただ縦方向にのみ締め出されていたのではなかった。半島人の役人がサラゴサからカルタヘナ、マドリッド、リマ、そしてまたマドリッドへと旅することができたとすれば、「メキシコ人」クレオール、「チリ人」クレオールは、植民地メキシコ、植民地チリの領域内でのみ勤めるのが普通だった。つまり、彼の横方向の動きも、縦方向への上昇と同じく、せまく限られていたのである。こうして、彼が円弧を描いて登りつめていく頂上、彼が任命される最高の行政的中心は、彼が現にいる帝国の一行政単位の首都であった。⁽³⁵⁾しかし、このせまくかぎられた巡礼の旅において、彼は旅の同伴者と巡り合い、かれ

らはその共同性が、その巡礼の旅の特定の広がりにもとづくばかりではなく、大西洋のこちら側で生まれてしまったという共通の運命にもとづくものであることを悟るようになった。たとえ父親が移住して一週間もたたないうちに生まれたとしても、彼がアメリカで生まれたという偶然は、言語、宗教、出自、礼儀作法、いづれにおいてもスペイン生まれのスペイン人となんら違いがないにもかかわらず、彼に従属的地位をあてがったのだった。それに対してはどうすることもできなかった。彼はクレオールであり、それは手の施しようのないことであつた。しかし、この排斥のいかに不条理とみえたことか！ にもかかわらず、こうした不条理の内に隠されていたのは次のような論理であつた。南北アメリカで生まれた者が真のスペイン人になれるはずがない。それ故、スペインで生まれた半島人は、真のアメリカ人になれるはずがない。³⁶⁾

それでは、こうした排斥は、本国において、なぜ合理的とみえたのか。それは、疑いもなく、一六世紀以来、ヨーロッパ人およびヨーロッパ権力が地球全体へと拡大するにもなつて、生物学的、生態学的汚染の概念が成長し、これが、伝統あるマキアヴェリ主義と合流したためだった。君主の視角から見れば、アメリカのクレオールは、かれらが止むことなく増え続け、また世代毎に現地定着化の傾向を深めることによつて、歴史に例のない政治的難問を突きつけていた。史上初めて、本国は、ヨーロッパのはるかかなたで、当時としては膨大な数の「ヨーロッパ人同胞」(スペイン領アメリカで、その人口は、一八〇〇年までに三〇〇万を超えていた)に対処せねばならなかつた。かりに原住民が武器と病氣によつて征服でき、またキリスト教、そしてまったく異質の文化(そして当時としては進歩した政治組織)の神秘性によつて

支配できたとしても、クレオールはそうはいかなかった。かれらは、武器、病氣、キリスト教、ヨーロッパ文化に対し、本国人とまったく同じ関係をもっていた。別の言い方をすれば、かれらは、原理的に、自己の権利を主張しうる政治的、文化的、軍事的手段をいつでももっていた。かれらは植民地の共同体を構成し、同時に上流階級でもあった。かれらは経済的に支配され搾取さるべき存在であったが、同時に帝国の安定に不可欠の存在でもあった。こうしてみると、クレオール有力者と封建貴族の地位がよく似たものであったことが見てとれよう。両者は共に君主の権力にとり決定的に重要であったが、同時にまたそれへの脅威でもあったのである。こうして、副王、司教として派遣された半島人は、初期の絶対主義官僚制における新貴族と同じ機能を果たした。³⁷⁾たとえ副王がその故郷のアンダルシアでは大公であっても、ここ、五〇〇マイル離れた地、クレオールのなかでは、本国の主君にまったく依存する事実上の新貴族にすぎなかった。半島人の役人とクレオール有力者の微妙な均衡は、新しい舞台における古い分割統治政策の表現だったのである。

しかも、南北アメリカ、さらにはアジア、アフリカの一部においてクレオール共同体が成長すると、これにつづいて、まれにしか見かけぬめずらしい存在としてではなく、歴然とした社会集団として、ユーロメリカン（ヨーロッパ人とアメリカ人の混血）のみならず、ユーラシアン（ヨーロッパ人とアジア人の混血）、ユーラフリカン（ヨーロッパ人とアフリカ人の混血）が不可避的に出現することになった。そして、かれらの出現は、近代的人種主義を予兆する思考様式をはびこらせることになった。ヨーロッパの世界的征服の一番手、ポルトガルは、これについて恰好の例を提供している。一五世紀末にドン・マヌエル一世

はなお、その「ユダヤ人問題」を強制的、集团的改造³⁹によって「解決」することができ——おそらく彼はこれを満足すべき「自然」な解決策と考えた最後のヨーロッパ人支配者であった。³⁸しかし、それから一世紀もたないうちに、一五七四年から一六〇六年にかけてアジアでイエズス会を再組織した偉大なる修道士、アレサンドロ・バレンチャーノは、インド人と欧印混血人を聖職者として受け入れることに激しく反対して、次のように述べた。³⁹

この色浅黒い人種はすべて非常に愚かで墮落しており、最も卑しい精神の持ち主である。……メステイソとカステイソについて言えば、我々は、ごく少数か、あるいはひとりも受け入れるべきではない。特にメステイソに関しては、原住民の血を多くもっていればいるほど、かれらはますますインド人に似ることになり、それだけますますポルトガル人から侮られるからである。

(ただし、バレンチャーノは、日本人、朝鮮人、中国人、「インドシナ人」を聖職者として受け入れることは積極的に奨励した。これはおそらく、これらの地域にまだメステイソがほとんどいなかったからであろうか。) 同様に、ゴアのポルトガル人フランシスコ会修道士も、クレオールを修道会に受け入れるのに激しく反対して、「たとえ純粋の白人の両親から生まれたとしても、(クレオールは) 幼児期、インド人乳母の乳を飲み、その血は一生穢れてしまっている」と主張した。⁴⁰ ボクサーは、「人種的」障壁、排斥が、それ以前と比較して、一七世紀から一八世紀にかけて、顕著に増加したことを示している。この有害な傾向

をさらに助長したのが、一五一〇年以降、ポルトガル人の開拓した（ヨーロッパでは古典古代以来初めての）大規模な奴隷制の復活であった。すでに一五五〇年代には、リスボンの人口の一〇パーセントは奴隷であり、一八〇〇年までには、ポルトガル領ブラジルの約二五〇万住民のうち、一〇〇万近くが奴隷であった。⁽⁴¹⁾

啓蒙主義も、本国人とクレオール⁽⁴²⁾の運命的差別を結晶化するのに間接的影響を及ぼした。二二年にわたって権勢を維持した啓蒙専制主義者ポンバルは、その在任期間（一七五五—一七七七）中、イエズス会士をポルトガル領から放逐したばかりでなく、「有色」臣民を「くろんぼ」、「メステイ⁽⁴³⁾ソ」などの蔑称で呼ぶことを犯罪行為として禁止した。しかし、彼は、この布告を、古代ローマの帝国市民の概念を引いて正当化したのであって、啓蒙主義思想家の理念によってではなかった。当時、もっと代表的だったのは、気候と「生態⁽⁴⁴⁾」が文化と性格に本質的影響を与えると論じたルソー、ヘルダーの著作で、これが広範な影響を及ぼした。そして、こうした考え方から、未開野蛮の半球「西半球」で生まれたクレオールは本国人と生来的に異なり、そして劣っている、したがって高位高官には不資格である、と便宜的、通俗的な結論を引き出すのはごく簡単なことだったのである。⁽⁴⁵⁾

ここまでのところ、我々は、南北アメリカにおける役人の世界、戦略的には重要であつても、しょせんごく小さな世界、に焦点を合わせてきた。しかも、この世界は、半島人とクレオールの衝突もふくめて、一八世紀末におけるアメリカの国民意識出現以前の世界であった。副王領内でのせまくかぎられた巡礼の

旅は、その領域的広がりが国民として想像されうるようになるまで、言い換えれば、出版資本主義の到来まで、何ら決定的帰結をもたらさなかった。

出版それ自体は、ヌエバ・エスパニーヤ〔新スペイン〕にかなり早く拡がったが、二世紀にわたって王権と教会の厳しい管理下に置かれた。印刷機は、一七世紀末まで、メキシコ市とリマにあるだけで、しかもその生産物をもっぱら教会関係の印刷物であった。プロテスタントの北アメリカでは、当時、印刷術はまだ存在しなかった。しかし、一八世紀になると、事実上の革命が起こる。一六九一年から一八二〇年の間に、二二二〇を下らない数の「新聞」が発行され、うち四六一は一〇年以上続いたのだ⁽⁴⁵⁾。

ベンジャミン・フランクリンの人物像は、北アメリカにおけるクレオール・ナシヨナリズムと分かち難く結びついている。しかし、彼の職業の重要性は、それほど知られていないかもしれない。ここでもまた、フェーヴルとマルタンから学ぶことが多い。かれらは書いている。「印刷業が〔北〕アメリカで発達するのは、実は、一八世紀に印刷業者が新しい収益源を見つけてからのこと、すなわち新聞を発行するようになってからのことであつた⁽⁴⁶⁾。」印刷業者は新しく印刷機をいれるといつも新聞をその製品のひとつとした。それどころか、印刷業者自身が、通常、新聞の主要な、ときには唯一の寄稿者でもあつた。こうして印刷業者「ジャーナリストは、当初、北アメリカ特有の現象となつた。そして、印刷業者「ジャーナリストにとつて、中心の問題は読者に到達することだつたため、ここに郵便局長との緊密な同盟が成立し、ときには、一方が同時に他方を兼ねるようになった。こうして、印刷業者の事務所は、北アメリカのコミユニケーションと共同体の知的生活の要として立ち現れた。スペイン領アメリカでは、この過程はもつと

ゆつくりとした断続的なものであったが、それでも同様に、一八世紀後半には最初の地方新聞が生まれた。⁽⁴⁷⁾ それでは、南北をとわず、初期のアメリカの新聞は、どのような特徴をもっていたであろうか。それは、基本的に、市場の添え物として始まった。初期の新聞は、本国についてのニュースの他に、商業ニュース——船の到着出帆予定、港での商品価格の動向——そしてさらに植民地における政治的任命、金持ちの家族の結婚などが掲載されていた。別の言い方をすれば、同一紙面に、この結婚とあの船、この価格とあの司教をまとめたのは、まさに植民地行政と市場システムの構造それ自体であった。こうして、カラカスの新聞は、まったく自然に、また非政治的に、その特定の読者同胞の集団に、これらの船、花嫁、司教、価格の属する想像の共同体を創造した。そしてもちろん、やがてはここに政治的要素が入り込むことになった。

これらの新聞の豊かな特色のひとつは、その地方性にあつた。植民地のクレオールは、機会があればマドリードの新聞を読んだかもしれないが（しかし、そこには彼の住む世界についてはなにも書かれていない）、同じ通りに住む半島人の役人の多くは、できることなら、カラカスの新聞など読もうとはしなかつたであろう。この非対称性は、他の植民地の状況においても、無限に反復されるものだった。もうひとつの特色は多元性にあつた。一八世紀末に発展したスペイン領アメリカの新聞は、それぞれ、自分たちの世界と並存する世界、そしてそこにすむ地方人たちを十分意識して書かれていた。メキシコ市、ブエノス・アイレス、ボゴタの新聞の読者は、たとえおたがいの新聞を読まなくとも、おたがいの存在についてはよく承知していた。そしてここに成立したのが、あのスペイン領アメリカ初期ナシヨナリズムの二重性

格、広大な空間的領域の広がりとは地方割拠性との並存であった。メキシコの初期ナシヨナリストが、みずからを「我々アメリカ人」、またみずからの国を「我々のアメリカ」と書いたという事実は、メキシコがスペイン領アメリカでもつとも価値ある地方だったことからメキシコのクレオールが自分たちこそ新世界の中心と考えた、そんなかれらの虚栄心をはしくも露呈したものと解釈されてきた。⁽⁴⁸⁾しかし、事実は、スペイン領アメリカ到るところで、人々はみずからを「アメリカ人」と考えたのであり、ここで「アメリカ人」という言葉は、まさにスペインの外で生まれたという共通の運命を指し示していたのであった。⁽⁴⁹⁾

しかし、それと同時に、すでにみたように、新聞という概念それ自体がすでに、「世界的事件」すら地方語読者の特定の想像の世界には屈折して入っていくことを意味しており、そして、想像の共同体にとつて、時間軸に沿った着実で揺るぎない同時性の観念は、決定的に重要な観念であった。そうした同時性は、スペイン領アメリカの広大さ、そしてその構成部分の孤立性の故に、想像することがきわめて難しかった。⁽⁵⁰⁾メキシコのクレオールは、ブエノス・アイレスで起こったことを、数か月後に知るかもしれない。しかし、それはメキシコの新聞を通してであつて、リオ・デ・ラ・プラタの新聞を通してではなかった。そしてそれらの事件は、メキシコで起こる事件の「一部」としてではなく、「よく似た」事件として登場したのだった。

この意味で、スペイン領アメリカ人の経験が永続的なスペイン領アメリカ全域におよぶナシヨナリズムを生み出すのに「失敗した」ことは、一八世紀後半における資本主義と技術の一般的発展水準、そしてスペイン帝国の行政的広がりとの相対的關係におけるスペイン資本主義と技術の「地方的」後進性を反映す

るものであった。(それぞれのナショナリズムがどの世界史的時代に生まれかということはおそらく、その広がりに対し、重要な影響を及ぼすものであった。インド・ナショナリズムは、セポイの反乱以降の、もつとも強力でもつとも発展した帝国主義権力による植民地行政と市場の統一から切り離すことができようか。)

これに対し、北部の英語を話すプロテスタントのクレオールは、「アメリカ」の理念を実現する上ではるかに有利な状況にあり、事実、ついには日常的に「アメリカ人」の名称を専有するのに成功した。最初の十三州が構成した地域は、ベネズエラより小さく、アルゼンチンの三分の一の規模しかなかった。⁽⁵⁾それは地理的にもよくまとまり、ポストン、ニューヨーク、フィラデルフィアを中心とする市場は相互に近接していて、住民は、商業的にも出版によつても比較的よく結びれていた。そしてこの「合州国」は、それ以降一八三年にわたつて、新旧住民が東部の古い中核地帯から西部に移動していくにつれ、しだいにその数を増やしていくことができた。しかし、アメリカ合衆国の事例においてすら、相対的な「失敗」あるいは縮小の要素がなかったわけではない。英語圏カナダを吸収しなかったことと、一〇年にわたる独立主権のテキサス(一八三五―四六)の存在である。かりに一八世紀のカリフォルニアにかなりの規模の英語を話す人々の共同体が存在していたとしたら、ペルーに対するアルゼンチンの役回りを十三植民地に対して演じる独立国家がそこに成立しえたのではあるまいか。アメリカ合衆国においてすら、ナショナリズムの情緒的絆はかなり伸縮自在であり、西部のフロンティアの急速な拡大と南北経済の矛盾によつて、独立宣言から一世紀もあとになつて分離戦争が起こつたほどであった。そしてこの戦争は、いまになつてみれば、

グラン・コロンビアからベネズエラとエクアドルを、リオ・デ・ラ・プラタ合州国からウルグアイとパラグアイを分離した戦争を思い出させるものと言える。⁽⁵²⁾

以上述べてきたことから、ここでは、暫定的な結論を引き出すよりも、むしろこれまでの議論の限界と範囲を再確認しておくことにしよう。以上の議論は、たとえば一七六〇年から一八三〇年にかけて西半球に起こった本国に対する抵抗の社会経済的基礎を説明しようとするものではなく、なぜ、抵抗が、他の形態においてではなく、複数の「国民的」形態において概念化されたのかを説明しようとするものである。経済的利害の問題についてはよく知られており、明らかに基本的な重要性をもっている。自由主義と啓蒙主義思想も、とりわけ帝国主義と旧体制に対するイデオロギー批判の武器を提供したという点で、明らかに大きな衝撃を及ぼした。私がここで提起していることは、経済的利害も自由主義も啓蒙主義も、それ自体としては、これら旧体制の強奪から守るべき想像の共同体の種類。または形態を創造することはできなかったし、創造しなかつたということにある。つまり、別の言い方をすれば、経済的利害、自由主義、啓蒙主義などは、視野の中心にある憧憬ないし嫌悪の対象に対立するものとしての新しい意識の枠組み^{フレーム}——ほとんど意識されないでいながら、その視野を規定し、それを通して我々がみる眼鏡のフレーム——を提供するものではなかつた。⁽⁵³⁾この特定の任務の達成のために、遍歴のクレオール役人と地方のクレオール印刷業者は、決定的な歴史的役割を演じたのである。

- (1) クレオール、クリオリヨ (Creole; Criollo) —— (少なくとも理論的には) 純粹のヨーロッパ系
の出自をもつが、南北アメリカ (やがては、ヨーロッパ以外の全地域) で生まれた者。
- (2) *The Break-up of Britain*, p. 41.
- (3) Gerhard Masur, *Simon Bolívar*, p. 17.
- (4) Lynch, *The Spanish-American Revolutions*, pp. 14-17 and passim. この割合は、重要な商業的、行
政的機能が、スペイン生まれのスペイン人によってほとんど独占され、一方、土地所有だけがクレオー
ルに開放されていたという事実によつてゐる。
- (5) この点で、それは、一世紀後の「南アフリカにおける」ポーア・ナシヨナリズムとよく似ている。
- (6) トウパック・アマルーがスペイン王への忠誠をまったく否認したのでないことは、注意しておく必
要がある。彼とその追隨者 (その多くはインディオであつたが、白人、メステイソもいた) は、リマ
の体制に憤激して立ち上がったのだつた。Masur, *Bolívar*, p. 24.
- (7) Seton-Watson, *Nations and States*, p. 201.
- (8) Lynch, *The Spanish-American Revolutions*, p. 192.
- (9) *Ibid.*, p. 224.
- (10) Edward S. Morgan, 'The Heart of Jefferson,' *The New York Review of Books*, August 17, 1978,
p. 2.
- (11) Masur, *Bolívar*, p. 207; Lynch, *The Spanish-American Revolutions*, p. 237.
- (12) ただし、それは、さまざまの紆余曲折を経たあとのことだつた。一八一〇年、ベネズエラ独立宣言
の直後に、彼は自分の奴隷を解放した。一八一六年、ハイチに逃亡すると、彼は全解放地域における奴

隷制の廃止を約束し、その見返りとしてアレクサンドル・ペシオン大統領から軍事援助を得た。この約束は、一八一八年、カラカスにて果たされた。しかし、一八一四年から一八一六年にかけてのマドリドのベネズエラでの成功が、ひとつには、マドリドが忠誠奴隷の解放を行ったことによったということも忘れてはならない。一八二一年、ポリバルは、グラン・コロンビア（ベネズエラ、ヌエバ・グранаダ、エクアドル）の大統領に就任すると、奴隷の子供を解放する法律を議会に要請し通過させた。彼は、「大地主の怒りを買うのを恐れ、奴隷制の全廃を議会に要請しなかった。」Masur, *Bolivar*, pp. 125, 206-207, 329 and 388.

(13) Lynch, *The Spanish-American Revolutions*, p. 276. 傍点引用者。

(14) これは実は時代錯誤である。一八世紀にはラス・エスパニーヤス (Las Españas) が普通で、エスパニーヤ (España) とは言わなかった。Seton Watson *Nations and States*, p. 53.

(15) マドリドのこうした新たな攻勢は、ひとつには啓蒙主義理念の産物であり、ひとつには慢性的財政問題、またひとつには、一七七九年以降、英国との戦争の産物であった。Lynch, *The Spanish-American Revolutions*, pp. 4-17.

(16) *Ibid.*, p. 301. 一〇〇〇万ペソのうち、四〇〇万ペソはスペイン領アメリカの他の地域における行政補助のために使われ、六〇〇万ペソが純益であった。

(17) *Ibid.*, p. 17.

(18) 第一次ベネズエラ共和国憲法（一八一一年）は、多くの箇所でアメリカ合衆国憲法からの逐語的借用を行った。Masur, *Bolivar*, p. 131.

(19) ブラジルがなぜ例外となったか、その優れた詳細な構造的分析として、José Murilo de Carvalho, "Political Elites and State Building: The Case of Nineteenth-Century Brazil," *Comparative Studies in Society and History*, 24: 3 (1982), pp. 378-99 参照。ここでは重要な要因を二つ挙げておくことにし

よう。ひとつは教育制度の相違である。スペイン領アメリカでは「二三の大学がやがて二三の別々の国となる地域に分散していた。」これに対し、「ポルトガルは、神学校を別とすれば、その植民地に高等教育機関を設立することをまったく認めなかった。」高等教育はコインブラ大学でのみ許され、したがって、クレオール・エリートの子供たちは海の向こう、本国に渡り、多くは法律を学んだ。もうひとつの要因はクレオールの将来展望の違いであった。デ・カルバリーヨによれば、「アメリカ生まれのスペイン人は「ブラジルのクレオールに比べて」スペイン側でもっとずっと高官ポストから排除されていた。」またスチュワート・シユウォルツは「植民地時代の最初の三〇〇年、ブラジルには印刷機がなかった」と言う。これについては Stuart B. Schwartz, "The Formation of a Colonial Identity in Brazil," chapter 2 in Nicholas Canny and Anthony Pagden, eds., *Colonial Identity in the Atlantic World, 1500-1800* 参照。引用は三八ページ。

(20) ほとんど同じことが十三植民地に対するロンドンの姿勢、そして一七七六年革命のイデオロギーに
ついても言える。

(21) Lynch, *The Spanish-American Revolutions*, p. 208 ; Masur, *Bolivar*, pp. 98-99 and 231 参照。

(22) Masur, *Bolivar*, p. 678.

(23) Lynch, *The Spanish-American Revolutions*, pp. 25-26.

(24) Masur, *Bolivar*, p. 19. 当然のことながら、こうした措置はごく部分的にしか強制できず、つねに多くの密輸が行われていた。

(25) *Ibid.*, p. 546.

(26) Turner, *The Forest of Symbols : Aspects of Ndembu Ritual* と同じ "Betwist and Between : The Liminal Period in Rites de Passage" の章を参照せよ。また、後年におけるその理論的まとめとして、*Dramas, Fields, and Metaphors : Symbolic Action in Human Society* 第五章 ("Pilgrimages as Social

Processes”) 第六章 (“Passages, Margins, and Poverty: Religious Symbols of Communitas”) を見よ。

(27) Bloch, *Feudal Society*, I, p. 64 参照。

(28) ここには、ラジオ到来以前の時代の国民主義運動草創期にみられる二重性、二言語を使うインテリゲンチアと大多数の文盲の労働者、農民、この両者がそれぞれに果たした役割との明白な類似が認められる。一方、ラジオは、一八九五年になってやっと発明され、印刷物のほとんど浸透していなかったところに、直接、出版を迂回して、想像の共同体を聴覚的に表現することを可能にした。ヴェトナムとインドネシアの革命、さらにその他の二〇世紀半ばのナショナリズムにおけるラジオの役割はこれまで不当に過小評価されており、十分な研究がおこなわれていない。

(29) この「世俗的巡礼」を、奇抜な比喩とってはならない。コンラッドは、闇の奥におけるレオポルド二世の妖怪の代理人を「巡礼」と表現したが、それは、諷刺的であるばかりでなく、正確な表現でもあった。(「コンラッド、『闇の奥』、中野好夫訳(岩波文庫、一九五八年) 参照)

(30) これはとくに、(1)一夫一婦制が宗教的、法的に強制され、(2)長子相続権が確立し、(3)肩書が相続できるとともに、概念的、法的に官職から区別されているところ、たとえばシャムとの対照での英国のごとく、地方貴族が相当の独立した権力をもっているところで、とりわけそうであった。

(31) Bloch, *Feudal Society*, II, pp. 422ff. 参照。

(32) 明らかにこの合理性はあまり誇張されるべきでない。連合王国においては、一八二九年までカトリック教徒は公職から締め出されており、これは決して例外的なことではなかった。そして、長期にわたるこうした排斥が、アイルランド・ナショナリズムの育成に重要な役割を果たしたことは疑いない。

(33) Lynch, *The Spanish-American Revolutions*, pp. 18-19, 298. 約一万五〇〇〇名の半島人のうち、半分は兵士であった。

(34) 一八〇〇年代、スペインには常時、約四〇〇名の南アメリカ人が滞在していたらしい。そのなかに、「アルゼンチン人」サン・マルティンもおり、彼は、幼時、スペインに連れてこられてから、二七年をそこで過ごし、その間、貴族子弟のための王立アカデミーに学び、ナポレオンとの戦闘で傑出した功績を挙げながら、独立宣言の報に接するや、故郷に戻ったのだった。また、ポリールは一時マドリッドで、マリー・「アントアネット・」ルイ王妃の「アメリカ人」の情人、マヌエル・メリヨと一緒に寄宿していた。マスールは、ポリールについて、彼が「金持ちで怠惰で宮廷では疎んじられている」「若い南アメリカ人のグループ」のひとり（一八〇五年頃）であり、「多くのクレオールが母国に対して抱いていた憎悪と劣等感は、かれらのうちで革命的衝動へと育ちつつあった」と記している。Bolivar, pp. 41-47 and 469-70 (San Martin).

(35) やがてときがたつにつれ、軍人の巡礼も文官のそれに等しく重要となった。「スペインは、アメリカに常備軍を大規模に駐屯させるだけの資金も人的資源ももっていないかった。その結果、スペインは、植民地民兵に主として依存し、これが一八世紀半ば以降、拡充され再編されていった。(Ibid., p. 10) これらの民兵はきわめて地方的な存在で、全大陸的治安維持機構の交換可能な部品ではなかった。かれらは、一七六〇年代以降、イギリス人の侵入が増加するにつれ、ますます決定的な役割を果たすようになった。ポリールの父親は、ベネズエラの港を侵略者より防衛した著名な民兵指揮官であり、ポリール自身、十代のときに、父親の民兵組織に従軍した。(Masur, Bolivar, pp. 30 and 38) この点で、彼は、アルゼンチン、ベネズエラ、チリの第一世代の国民主義指導者の典型であった。Robert L. Gilmore, *Caudillism and Militarism in Venezuela, 1810-1910*, 第六章 ['The Militia'] 第七章 ['The Military'] 参照。

(36) 独立が南北アメリカにもたらした変容に注意せよ。移民の一世は、いまや、「最も高貴な」存在から「最も低級な」存在、すなわち、出生地によって運命的に汚染された存在となった。同じような倒立

は、人種差別への反応についても起こる。「黒い血」——タールはけの染み——は帝国主義の下では「白人」にとつて絶望的な汚染とみなされた。今日、少なくともアメリカ合衆国においては、「ムラトウ」「白人と黒人の混血児」という言葉は博物館入りしてしまっている。「黒い血」のほんの僅かの痕跡が、人を見ごとに「黒人」にする。フェルミンの樂觀的な離婚計画、そして「この雑婚によつて生まれる」子孫の色についての彼の無関心と対照せよ。〔第II章参照〕

(37) 植民地経営は信頼しうる人物に託されるべきであるとのマドリードの深刻な関心からすれば、「高位の官職が生粋のスペイン人によつて専ら占められるべきは自明の格率であった。」Masur, *Bolivar*, p. 10.

(38) Charles R. Boxer, *The Portuguese Seaborne Empire, 1415-1825*, p. 266.

(39) *Ibid.*, p. 252.

(40) *Ibid.*, p. 253.

(41) Rona Fields, *The Portuguese Revolution and the Armed Forces Movement*, p. 15.

(42) Boxer, *The Portuguese Seaborne Empire*, pp. 257-58.

(43) Kemiläinen, *Nationalism*, pp. 72-73.

(44) わたしがここで半島人とクレオールの人種主義的差別を強調するのは、ここでの主題がクレオール・ナシヨナリズムの勃興にあるからである。しかし、このことは、メステイソ、ニグロ、インディオに対するクレオールの差別の成長を矮小化するものではないし、またなんら直接に脅威を感じぬ本国人がこれら不遇の者たちを（ある程度）保護しようとしたということを通小評価するものでもない。

(45) Febvre and Martin, *The Coming of the Book*, pp. 208-11.

(46) *Ibid.*, p. 211. 【『書物の出現』下、六七ページ】

(47) Franco, *An Introduction*, p. 28.

(48) Lynch, *The Spanish-American Revolutions*, p. 33.

(49) 「一人のペオン〔日雇い労務者〕が農園でスペイン人監督に殴られたと訴え出た。サン・マルティンは憤慨した。しかし、かれの怒りは、社会主義者としての怒りではなく、ナシヨナリストとしての怒りだった。『なんてことだ。革命三年にもなるというのに、半島人の奴がまだアメリカ人を殴るなんて!』 *Ibid.*, p. 87.

(50) スペイン領アメリカ住民を圍繞する辺鄙と孤立、『百年の孤独』において、マルケスはこれを伝説のマコンドの情景として呪縛的に描いている。

(51) 十三植民地の総面積は、三二万二四九七平方マイル、ベネズエラの面積は三五万二一四三平方マイル、アルゼンチンは一〇七万二〇六七平方マイル、スペイン領南アメリカの全面積は三四一万七六二五平方マイルであった。

(52) パラグアイの事例はとりわけ興味深い。一七世紀初頭、イエズス会士によって設立された比較的恩情的な専制支配によって、原住民はスペイン領アメリカのどこよりも恵まれた扱いを受け、グアラニ語は出版語の地位を得た。一七六七年、イエズス会士がスペイン国王によりスペイン領アメリカから追放されると、この地域はリオ・デ・ラ・プラタに組み込まれたが、それはすでに手遅れで、一世代と続かなかった。Seton-Watson, *Nations and States*, pp. 200-201 参照。

(53) 一七七六年の独立宣言が「人民」について語るのみで、「国民」という言葉は一七八九年憲法においてやっとデヴェューしたということは、この意味で、実に示唆的である。Kemiläinen, *Nationalism*, p. 105.